

幻のミカン王国

☆ 大分合同新聞社 (文：木本崇、写真：杉山和也)

- ① 夢破れても「道」捨てぬ
一大産地へ突進、／負担金の返済重く／「銭カネじゃない」
- ② 家は守るが農業継がず
「オレンジロード」／スタート時に不安／若者は残ったが…
- ③ 官主導じゃ対応遅れる
「助産婦から和尚」／公の事業止まらず／まず「現場」が行動
- ④ 「専門の誇り」守り抜く
「価格が戻れば…」／開拓助成の第1号／かつてない厳しさ
- ⑤ リース農園に活路求める
新規参入を容易に／知恵絞り負担抑制／消費者離れに不安
- ⑥ 技術・経営法磨き再出発
10年後は3分の1／「露地」を立て直し／輸入モノに負けぬ

はじめに

今、地方はひん死の状態にある。
過疎化と高齢化の波がムラを次々にのみ込んでいる。

高度経済成長の階段を駆け上り始めた1960年代以降、
日本社会は全国津々浦々から
数知れないムラ人たちを、
都会へ、都会へ、と駆り立てていった。
人がいなくなったムラには、荒れた田畑や山林が残され、
集落の崩壊、消滅がじわじわと進行している。

その一方では、
新天地を求めて都会からムラへ移り住む「新田舎人」たちの姿も目立つ。

過疎市町村の比率が全国一高い過疎大県・大分の
今と明日を見つめながら、地域社会再生への道を探る

1999年10月17日

●デジタル版「新田舎宣言」について

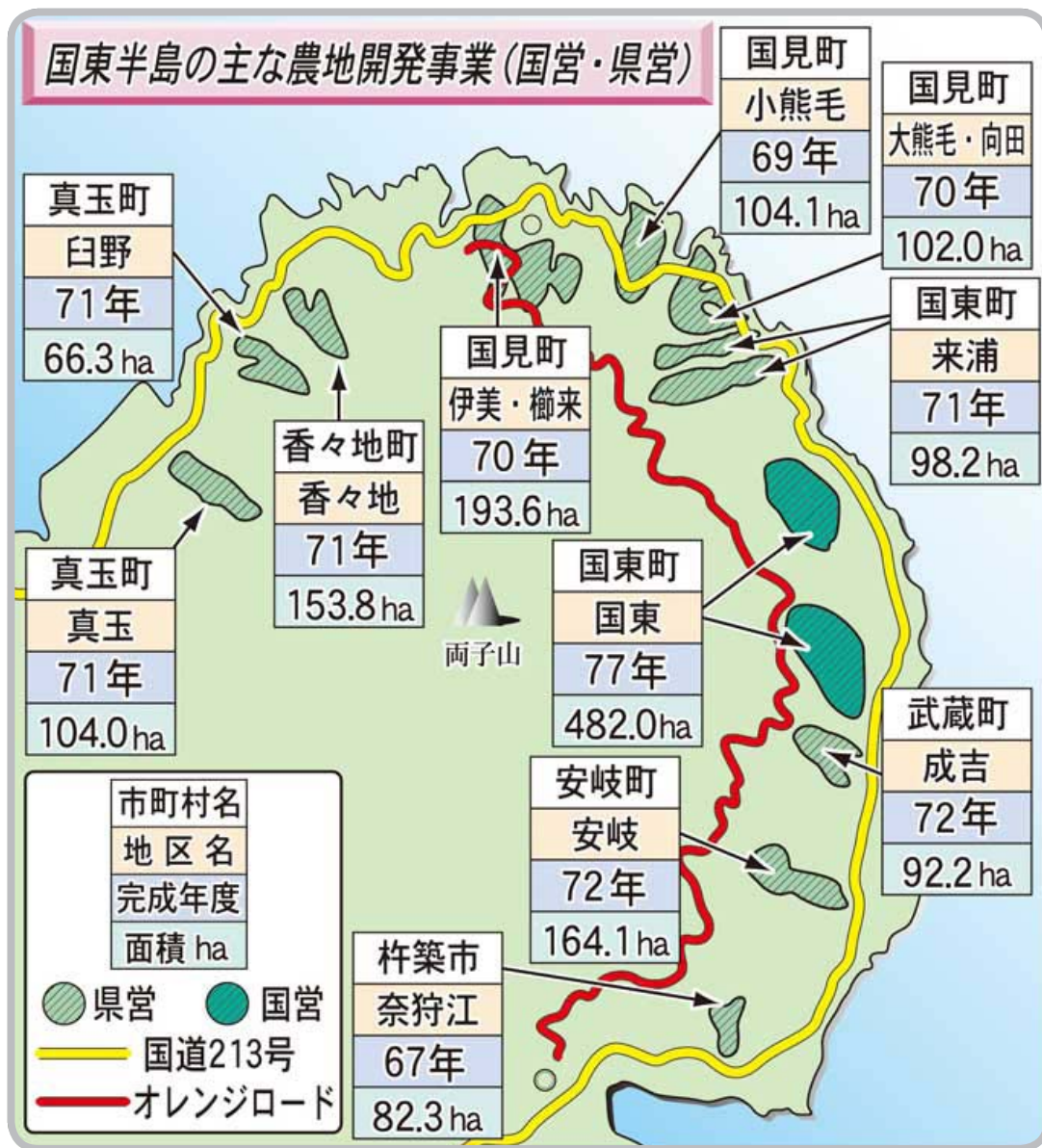
「新田舎宣言—地域社会再生へのアプローチ」
は、大分合同新聞が1999年10月17日から
翌2000年7月1日にかけて掲載した全9部
56篇の連載記事。今回、連載当時の記事と写
真を原則そのままに、デジタルブックとして再
構成しました。登場人物の年齢をはじめ文中の
記述内容は、連載時点のものです。

2008年10月10日

NAN-NAN 事務局

① 夢破れても「道」捨てぬ

2000年1月29日



■一大産地へ「突進」

国東半島の北部にある国見町向田地区。冬の周防灘を渡ってくる北風が冷たい。

年明けの1月中旬。南向きの斜面にあるミカン園で、松本薫さん(69)は黙々と温州ミカンの木を切り続けていた。

「今年みたいに露地ミカンが安ければ、もういかれん。あきらめがついた」

30アールの園地にあった約230本。30年以上も手塩にかけて育ててきた木だ。手のこで枝を切り落とし、ごつごつした根元部分はチェーンソーで切り倒した。

国東半島一帯では、1960(昭和

35) 年代から 70 年代前半にかけて、大規模な農地開発事業が実施された。

通称「開拓パイロット事業」。国、県が多額の補助金をつぎ込み、市や町が音頭を取って、次々にミカン園を造成した。国営、県営合わせて 1 市 6 町で 1643 ヘクタール。一大ミカン産地の夢が膨らんでいった。松本さんも 80 アールの園地を手に入れ、67 年に苗を植え付けた。

「国見町は最盛期で 1 万 3000 トン、5 億円のかん橘を出荷していた。今は 10 分の 1 以下、1000 トンあるかどうか」。向田地区で最後まで残っていたパイロット事業の名残に、松本さんは見切りをつけた。

■負担金の返済重く

松本さんが園地を開墾してミカン栽培を始めたのは、パイロット事業が始まる前の 62 年ご



パイロット事業で植えたミカンの木を伐採する松本薫さん

ろ。「『ミカン1本、米1俵』の時代。中津の市場に出すと、いいミカンじゃと褒められた」。

間もなく国東半島でミカン園の造成ラッシュが始まった。「向田の田と畑は60ヘクタール。そこにパイロットで50ヘクタールもミカン園ができた。『列車に乗り遅れるな』と町が旗を振っていた」。

このころ、全国のあちこちでパイロット事業が進んでいた。70年の温州ミカン栽培面積は全国で16万3000ヘクタール。10年間で2.5倍に急増した。国東半島の園地造成がほぼ終了した72年、全国の生産量は早くもピークに達した。

生産過剰による価格暴落。お決まりのコースをたどり「ミカン王国」の夢は挫折した。手入れの行き届かない園地は竹やぶになった。

パイロット事業の負担金返済が、農家の肩に重くのしかかってくる。子供の教育費もかさむ。現金収入が必要だった。松本さんは74年ごろ

から、山口県新南陽市の化学工場へ出稼ぎに行き始めた。

ミカン園や水田も「留守」にはできない。竹田津港からフェリーに乗り会社の寮に着くのは深夜。翌日から3日間働いて、またフェリーで自宅に帰り農作業をする。そんな生活が16年間続いた。

「結果として勤めに出てよかったかもしれない。59歳まで働けて、厚生年金ももらっているし」。

■「銭カネじゃない」

ミカンの苗を植えただけで栽培をあきらめた人。土地代や苗の植栽費用の返済で土地を手放す人も出た。「パイロット事業はいったい何だったのか」。国も県も町も、疑問に答えてはくれない。

だが、松本さんはミカン栽培をあきらめない。数年前から優良品種や、ポンカンへの改植を続

けている。

「百姓は銭カネじゃない部分がある。収穫の喜びもある。もう一回いい目を見たい。自分たちは年寄りだからいいが、このままではミカンに若い人が根付かない。過疎地で第一次産業を守らないと、地域が崩壊する」。松本さんには農業へのこだわりがある。



国東半島に「ミカン王国」を築こうとした開

拓パイロット事業。30年後の今、半島一带には荒れ果てた広大なミカン園地が、あちこちに散在している。

農業の衰退とテンポを合わせるように、人口流出も急速に進み地域社会の存続さえ脅かしている。

地域で支え合い、知恵を出し合いながら、新しい農業のかたちを模索する生産者の姿も交えながら、過疎地の農業と地域振興を考える。

② 家は守るが農業継がず

2000年1月30日

■ 「オレンジロード」

国東地区広域営農団地農道、通称「オレンジロード」。両子山から放射状に広がる山と谷を縫うように、国東半島の南北を結んでいる。

杵築市から国見町まで全長52.2キロ。15年の歳月をかけて、1985（昭和60）年に全線開通。総事業費は100億円。広域営農団地農道としては当時、全国最大規模だった。

半島に散在するミカン園地を一つの営農団地として機能させる、「生産と流通の大動脈」となるはずだった。

2車線のオレンジロードを走ってみた。北へ行けば行くほど雑木林ばかり。沿線にミカン園を見つけるのは難しい。擦れ違う車も少ない。「大動脈」とはかけ離れた風景が続く。

「山ひとつ隔てた隣の地区に行くのは、本当に便利になった。ただ全線開通した時には、ミ



「生産と流通の大動脈」となるはずだった「オレンジロード」

カンはまだ下り坂。武蔵町から先は『ススキロードだ』と皮肉る人もいた」。国東町上小原の佐久間勝己さん（55）は振り返る。

■スタート時に不安

佐久間さんは、もともと愛媛県の出身。小学生のころ、父が一家6人を連れて上小原に入植した。

自宅はオレンジロードから5キロほど山あいに入ったところ。きれいに石積みをした段々畑には、温州ミカンとキウイの棚が並ぶ。

佐久間さんは66年から2年間農業研修で米国に渡った。広大なレモン園で近代的な農業経営を体験して、果樹栽培への夢が広がった。帰国後にパイロット事業の園地2.5ヘクタールを取得した。

国東半島のパイロット事業は国営が1地区・482ヘクタール、県営が10地区・1061ヘクタール。総事業費は59億円。国、県が事業集

の約80%を負担。地元負担は約20%だけ。

農家は土地代や工事費の一部を負担するが、負担金の返済は25年間の分割払い。苗の植栽費用などの融資制度も手厚かった。

有利な条件に誘われて、地元だけでなく入植者も続々と手を挙げた。最終的に1597戸の農家が参加した。

「20キロのコンテナで5000箱、100トンを作るのがミカン農家としての目標だった。でも、パイロットが始まったころから生産過剰の不安はあった」。佐久間さんの不安は、的中した。

ミカン農家の経営は70年代前半から、年を追うごとに厳しくなっていく。生産過剰と価格低落、オレンジの輸入自由化。88年から国はついに、温州ミカンの減反に着手。10アール当たり約30万円の助成金を出して、温州ミカンの伐採を奨励した。

増産政策から25年余り。農政は大きくかじを切った。

「石を一つずつ積んで開墾した人と違って、パイロットで農地を配分された人はあまり執着がなかった。減反で見切りをつける人が多かった」。

■若者は残ったが…

ミカンの衰退は、国東半島の過疎化に拍車を掛けた。

県のテクノポリス構想によって、ハイテク産業が次々に進出した。「若者は残っているが、

働く場所が増えたから会社員が多い。家は守ってくれるけど、農業後継者はいない」。

佐久間さんには学生の長男と娘二人がいる。パイロット園地にハウスミカンを導入して、何とか経営は成り立っているが、農業を継がせるのはためらう。

「農業に夢を持つのが難しい。私たちが将来の見通しが立たないのだから、若い人に託せるだろうか」。キウイのせん定作業の手を休めて、ぽつりと漏らした。

③ 官主導じゃ対応遅れる

2000年1月31日



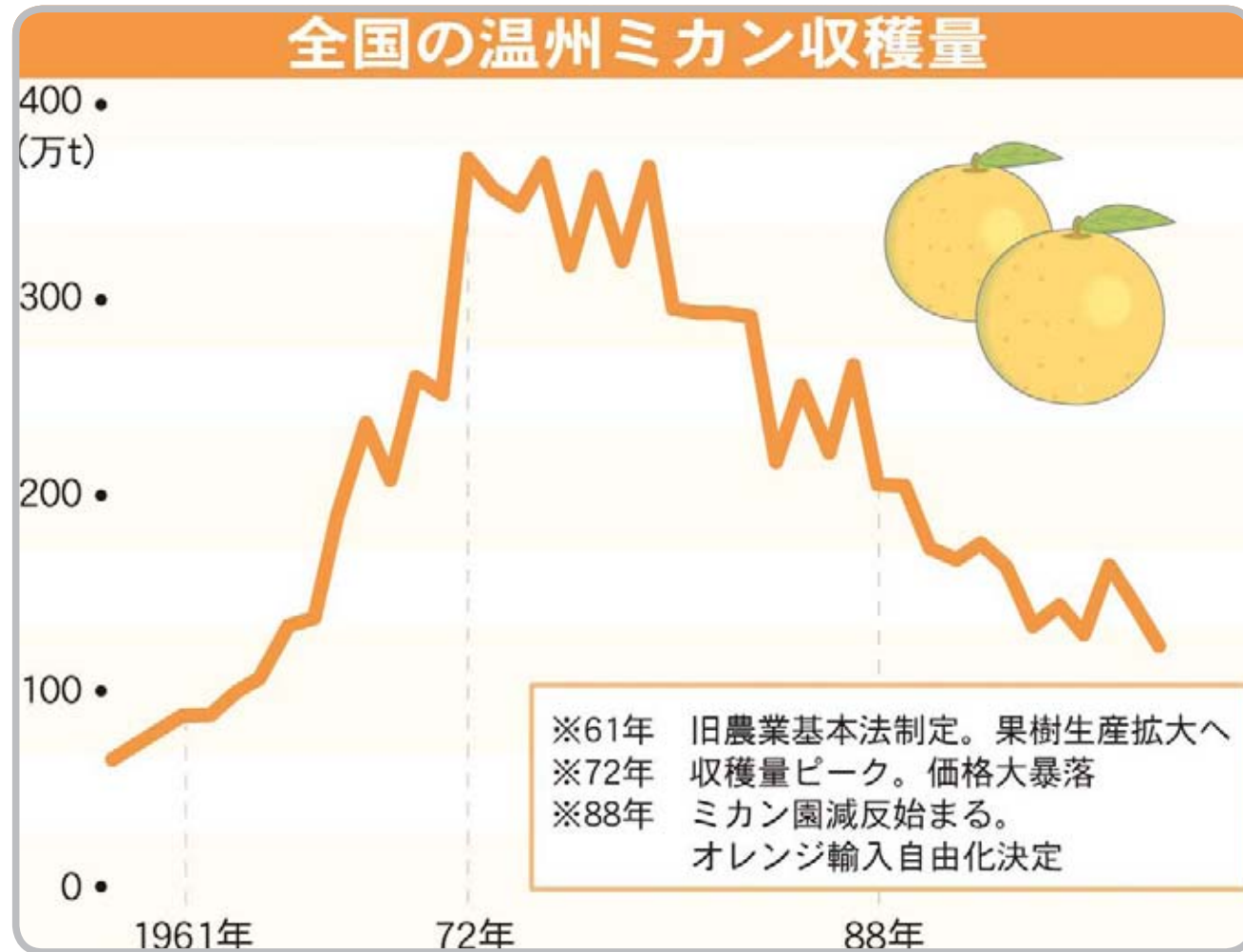
パイロット事業で建設されたミカンの貯蔵庫も今は利用されていない（杵築市奈狩江）

■「助産婦から和尚」

「良いときが10年、悪いとき10年、後始末に10年」。安岐町塩屋の服部善一さん（63）が振り返る開拓パイロット事業30年の歩みだ。

服部さんは柑橘（かんきつ）栽培の技術員だった。1959（昭和34）年に安岐町役場に採用。パイロット事業で奔走した。「ミカン園の造成から減反までかかわった。助産婦から和尚までやったようなもの」。苦笑いしながら話す。

事業参加を取りやめた農家の穴を埋めるために、自分も2ヘクタールの園地を取得した。だが、一回収穫しただけで、やめてしまった。



72年の価格暴落がこたえた。スプリンクラーまで設置したが、一度も使わなかった園地もあった。

多額の政府補助金がつぎ込まれたパイロット

事業。温州ミカンの改植事業の名目で補助金をもらいながら、果樹栽培に見切りをつけてクヌギ林に化けた園地もあった。

ある時、会計検査院の現地調査があった。問いただす検査官に、「クヌギはシイタケ栽培に使う。園地で育てれば木の生育が早い。農業生産につながるじゃないか」。服部さんは冷や汗をかきながら、苦しい弁明をした。

■公の事業止まらず

「直接、農家と接する市町村は建前だけではやっていけない。生産過剰や価格暴落で情勢が全く変わっても、国、県の補助事業は一度採択されると止められない」。

88年に温州ミカンの減反が始まると、割り当ての倍以上の伐採希望が殺到。今度は事務手続きに追われた。

大分県内の温州ミカン栽培の推移

	栽培面積 (ヘクタール)	収穫量 (千トン)
1960年	2720	30.8
65年	4980	45.1
70年	9430	108.2
73年	9920	167.2
75年	9500	182.5
88年	4720	86.0
98年	1890	35.9

「やはりオレンジ輸入自由化の影響がずしりときた。ミカン専業農家はなんとかとも生き残ろうと、大きな投資をしてハウスミカンを導入した。中途半端な人が意欲をなくした」。

ミカンの木がスギやヒノキ林に代わり、竹や雑木に覆われた園地も目立つ。96（平成8）年現在、パイロット事業11地区・約1600ヘクタールのうち、60%が「管理不良地」、いわゆる荒廃園になっている。87%が荒廃園という地区もある（県調べ）。

JAくにさき果樹課長の森重利さん（52）は30年以上、柑橘栽培の指導をしてきた。99年産も価格は低迷したまま。露地ミカン栽培の厳しさを痛感している。

「昔はいかに生産量上げるかが重要だった。現在は全国生産量はピーク時の3分の1。イ

チゴやメロンなど糖度の高い果物も増えたとし、食生活の変化で何よりもお菓子が最大の競争相手になった。国東半島は気候的な不利もあり、生き残りは厳しい」。

■まず「現場」が行動

服部さんは、97年春に役場を退職した。「行政主導ではどうしても対応が遅れる。農家や農協、現場に近い市町村がまず行動を起こす。それを国、県が後押しするのがいい。ハウスミカンだって、農家が先行して、自らリスクを背負って始めたから成功した。リスクを背負ってでも頑張る人の育成、指導が求められているのではないか」。国や県が用意した、画一的なお仕着せ農業政策の限界。一農家に戻った今、農業の行方をあらためて考えている。

4 「専業の誇り」 守り抜く

2000年2月1日

■ 「価格が戻れば…」

安岐町大添の「みかん山」地区は、全部で13世帯。町内で最も小さな行政区の一つ。杵築市との境に近い県道沿いに民家が点在する。ミカンを主体にした専業農家の集落だ。開拓パイロット事業とは無縁な地区だった。

斜面に広がる露地ミカン園は、秋が深まると緑とオレンジ色のコントラストが鮮やか。向かい側の大分空港道路沿いから、シャッターを切るアマチュアカメラマンもいる。

「今年はわせ温州が安かった。これから出荷する、なかにてやおくてで価格が戻るといいが」。

西山祥一郎さん（58）は4ヘクタールの園地をもつ露地ミカン専業農家。小雪が舞う1月下旬。西山さん方では妻の博子さん（55）、

出荷作業をする西山さん親子。パイロット事業が始まる前、昭和の初めからミカンづくりを続けている（安岐町ミカン山地区）



長男の祐治さん（32）の親子3人が出荷作業をしていた。長年使っている選果機の上を、ミカンが勢いよく転がっていく。丸一日かけて300箱、3トンの箱詰めをした。

出荷は農協を通さない。地区内と隣接する杵築市の生産者9人で、出荷組合を結成。契約をした北九州市と福岡市の市場に直接、出荷する。年内に収穫して倉庫で一時貯蔵。出荷は年が明けてから4月まで続く。

■開拓助成の第1号

古い木から新品種への改植。作業能率を上げるために木の高さを低く、小さく仕立てる。園内には2トントラックも乗り入れできる舗装道路が通る。

「安値に打ち勝つのは大変なこと。人並みのやり方をしてたんでは、生き残れない。自分でパワーショベルを使って園地の整備もする。コストを低くして、続けられる限り頑張る」。

みかん山地区は入植者がつくった集落。西山さんの祖父錨（いかり）さんは、旧西武蔵村（現安岐町）出身。ミカン栽培を志して適地を探し歩いた。

1914（大正3）年に杵築市茅場の原野を開墾して成功。31（昭和6）年に同じ西武蔵村出身の仲間四人と、「みかん山」一帯に入植した。当時、国は不況対策で開墾を奨励していた。開拓助成法の県内適用第一号だった。

「ここは（山ばかり）ミカンでも作らにゃ、何を作るか。帰るところもないし」と区長の室澄雄さん（65）。室さん方は3世代6人家族。妻のトシ子さん（57）の父留七さんが、39年ごろ移り住んだ。

地区の住民は66人。1世帯平均で約5人。3世代家族が多い。

毎年5月15日の「たちばな祭り」は、集落の二大行事の一つだ。温州ミカンの白い花が咲く時期に、地区の集会所に取引先を招いて大宴

会をする。歌い、酒をくみかわして、豊作を願う。

■かつてない厳しさ

園地の造成ラッシュ、価格暴落と減反。パイロット事業で国東半島のミカン栽培が劇的に変化する中でも、みかん山地区の人たちは黙々と「自分流のミカンづくり」を守り続けてきた。

西山家の「4代目」になる祐治さん（32）は県立農業実践大学校で学び、熊本のミカン農家で研修をした。

祐治さんの帰郷に合わせて、祥一郎さんは錨

さんが開いた杵築市の園地を、親せきから引き継いで規模を拡大した。ハウスミカンもやめて、露地一本に絞った。

この冬、みかん山地区もかつてない厳しい年を迎えている。全国的な豊作と品質低下で、99年産ミカンの価格は暴落している。専業農家への影響は大きい。

「いままでで一番悪いかもしれないが、苦しんでもしょうがない。もうけた時があれば、安値に苦しんだ時期もある。『継続は力』じゃ」。昭和の初めから代々続けできたミカンづくり。祥一郎さんには専業農家の誇りと意地がある。

5 リース農園に活路求める

2000年2月2日



満開のミカンの花に目を輝かせる若手生産者＝1月中旬、リース農園守江狩宿団地

■新規参入を容易に

「ちょっと花が多すぎるんじゃないか」「枝がしっかりしてるから大丈夫だろ」。

杵築市東部、別府湾から佐賀関町まで一望できる丘の上に、リース農園・守江狩宿団地がある。温州ミカンの白い花が満開のハウスの中で、30歳代の若手生産者が声を弾ませていた。今年7月には、初めての収穫が待っている。

リース農園。市とJA杵築市が協力して、1995（平成7）年から始めた新しい試みだ。荒廃園や未利用地を借り上げて、ハウスを建設。意欲のある生産者に貸して、ミカン栽培に取り組んでもらう。初期投資が不要なため、新規参入者も飛び込みやすい。

「借金に追われるばかりでは後継者が育たない」「若者が振り向く農業。サラリーマン並みの所得と労働時間の実現」。リース農園に活路を求める、JA杵築市の阿部典郎組合長（65）の発想だ。

守江狩宿団地は、31棟（計3.1ヘクタール）に16人が参入している。平均年齢は42.3歳。一帯は30年余り前、県営開拓パイロット事業で開墾。ミカンの価格暴落で、その後は荒廃園になっていた。

■知恵絞り負担抑制

ミカン経営の現状を考えると、リース料は年間50万円が生産者負担の限界。国や県、市の補助金を組み合わせるなど、知恵を絞ってリース料を抑えた。

ハウスは鉄骨構造。10年間張り替え不要の硬質フィルムで、台風に強い。温度管理、防除作業の自動化が進んでいる。「近所で同じように作っている人がいるのは心強い。『ちょっと花が少ないな』とか心配になったら、隣のハウスを見に行けばいい。同じ条件でやっているのでも良くも悪くも参考になる」。

杵築市守江の村井新平さん（35）は、リー

ス農園2棟を借りている。高校卒業後、長崎県の口之津果樹試験場で3年間研修をして実家に帰った。

「最初は父の手伝い。いまいち面白くなかった。一つのハウスを任されてから、作る楽しみが分かってきた」。いまは自宅そばのハウス1棟（15アール）と、露地1ヘクタールも任されている。

先発の奈多団地には11棟のハウス（計1.1ヘクタール）があり、6人が借りている。98年に初収穫。経営もまずまずで順調に滑り出している。来年度末までには、市内全域で180棟に増やす計画だ。

■消費者離れに不安

杵築市狩宿の亀井義則さん（55）は79年に、自前でハウスミカンを始めた。先進地を訪ね歩き、工夫を重ねた。杵築ハウスミカンを全国ブランドに育てる一翼を担った。97年には新た

に、守江狩宿団地のハウス三棟を借りた。

「リース農園は新しい挑戦。周年被覆のハウス（通常は収穫後にビニールを外す）で作る技術を杵築で確立したい」。

長男の秀朗さん（24）は大学卒業後、国東町の農林水産省常緑果樹農業研修所で一年間勉強して、昨年帰ってきた。妻の初美さん（49）ともども、親子三人の農業が始まっている。

村井さんにも不安がなくはない。ハウス部会青年部の研修で昨年、東京都内のスーパーで販売促進のセールスをした。

「若い人が買わないんですよ。一個の値段は変わらないのに、隣にあるグレープフルーツやオレンジを買っていく。消費書のミカン離れを食い止めるには、生産者側の努力が必要。産地として出荷量を減らさないためには、もっと後継者が増えないと」。

杵築のハウスミカンのこれからを真剣に考えている。

⑥ 技術・経営法磨き再出発

2000年2月4日

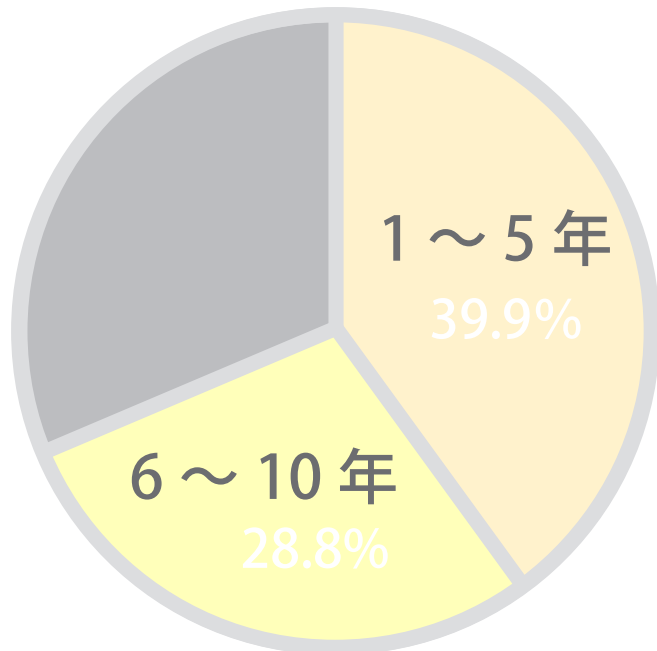
■ 10年後は3分の1

杵築、国東のミカン農家約900人が回答したアンケート調査＝下図＝は、生産者の高齢化と担い手不足の現状を浮き彫りにしている（杵築市、日出町、姫島村を除く東国東郡の農協の研究会に所属している農家が対象。昨年実施）。

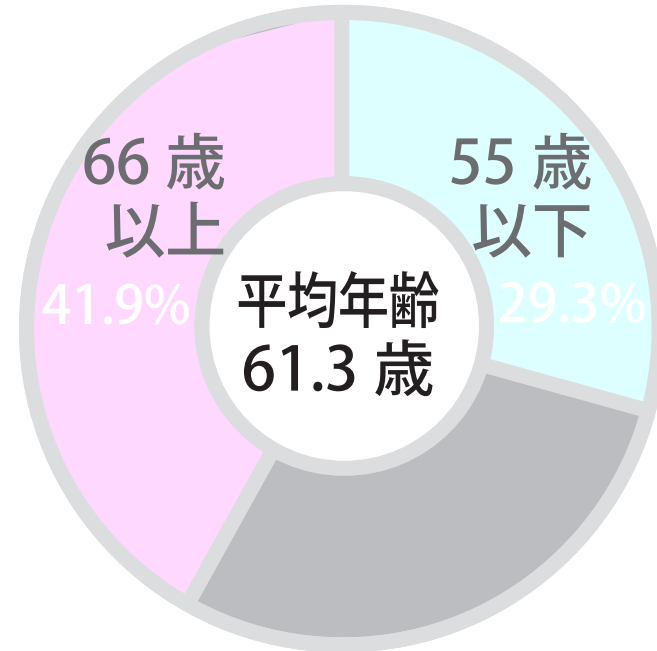
「裏を返せば10年後には3分の2の農家がやめる可能性がある。それだけ10年後の見通しが立たないということ。そこまで生産が落ち込むわけにはいかない」。

JA 杵築市の阿部典郎組合長（65）は、調査結果を厳しく受け止めている。ハウスミカン産

あと何年柑橘栽培を続けますか



農業経営者の年齢構成



地として確立した杵築でも、高齢化が将来の不安材料になっている。

■「露地」を立て直し

「基本の露地ミカンを立て直したい」と言う阿部組合長。栽培技術を磨いて、収穫量と収益が上がる、糖度の高い「うまい」露地ミカンを作りたい。開拓パイロット事業などが残した荒廃園や、条件の悪い園地を再生できないか一模索している。

「立派な園地を整備して、新しくミカンに挑戦する人に提供するのが理想だ。ハウスは重労働だから、主力になっている高齢者が長く続けていける栽培体系が必要。その人たちがこれからの農村の守り手になる」。近く試験園を造成する。

県柑橘（かんきつ）試験場長の甲斐一平さん（59）は試験場一筋。「農家が跡取りを残すには、経営的感覚と技術力が求められている」。阿部



「うまいミカン」づくりを目指して露地栽培の研究に取り組む国東町の県柑橘試験場

組合長と思いは同じ。露地ミカンの試験ほ場をつくって研究中。土を盛り上げた高畝とシートで覆うマルチ栽培を組み合わせた。省力化とうまいミカンを作る技術を追求している。

「露地で安定した経営ができれば、作業は楽だし、若い人はついてくると思う。過疎地でも一次産業の生活の基盤があれば、人が住んでくれる」。

■輸入モノに負けぬ

国見町竹田津の岸田和章さん（32）は、露地ミカンの専業農家を目指している。自宅の裏手に広がるミカン園。木の高さはまだ1メートルほど。

「今年の台風でほとんどの木が倒れてしまった。全部起こすのに1カ月。忙しくて、草を刈る暇がなかった」と苦笑いする。

岸田さんは大学在学中、熊本県の甘夏農家で実習をした。経営の実態をつぶさに見た。「こ

れならできのでは」とミカンづくりを決意、帰郷した。実家の園地1.5ヘクタールに、さらに3.5ヘクタールを買い足した。機械導入を前提に、自分の理想に合わせて整備した。

生産過剰を予想して、99年産は収穫を見送った。今年から3ヘクタールで収穫を見込む。勝負の年だ。「確実にいいものを作る技術が大切と気付いた。企業が農業に参入したり、輸入農産物が増えても、技術を持っていけば負けなと思う。取りあえず実績を上げないと」。秋の収穫に思いを託しながら、ミカンの木のせんだ作業に励んでいる。

国や県、市町村が音頭を取って推進した、国東半島の開拓パイロット事業。「ミカン王国」の夢が破れた今、地域は過疎化と高齢化のダブルパンチを浴びてあえいでいる。全国共通の「金太郎アメ」的な大規模農業開発がもたらしたものの。その反省から、地域独自の技術と経営手法を磨いて、再出発しようとしている。

■オオイタデジタルブックとは

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NANでは、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひNAN-NAN事務局にお寄せください。

NAN-NANでは、この「新田舎宣言」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!

大分合同新聞社



別府大学

「新田舎宣言 — 地域社会再生のアプローチ」

第4部 ● 幻のミカン王国

文：木本崇、写真：杉山和也

初出掲載媒体 大分合同新聞（2000年1月29日～2月4日）

《デジタル版》

2008年10月31日初版発行

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN事務局（〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社総合企画部内）

© 大分合同新聞社